【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和２年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	鳥栖市立鳥栖西中学校
1　前年度 評価結果の概要	学校教育目標「西中一心～夢の根っこを育てる～」のもと、確かな「学び」、豊かな「心」、健やかな「体」を鍛え、教師集団の「組織力」を磨き、生徒を取り巻く「環境」を整えるように学校運営を行った。校内研究では、県の指定を受け全教科・全領域において「活用力」を高める学習指導の工夫・改善に二年間に渡って取り組み、実践してきた。また、その成果を授業公開という形で発表することができた。保護者アンケートからは、本校の教育活動に対しておおむね好意的な評価をいただいた。また、教職員はチーム一丸となって学校教育目標や重点目標の実現に向けて取り組むことができている。生徒指導や学習指導においても共通理解のもと実践ができたものと理解している。次年度は、課題となっている特別支援教育の推進体制づくりと教員の専門性や指導力の向上のために校内研修の充実に努めていきたい。また、生徒の基礎学力向上、活用力向上のため授業研究会や校内研修を通して授業改善をさらに推進していくつもりである。
2　学校教育目標	西中一心～夢の根っこを育てる～ ・それぞれの生徒の「夢」を実現させるための「根っこ」を育てる教育を、全校一丸となって推進する。 ・それぞれの生徒が、自分と他人を大切にし、お互いに認め合い・高めあって、ともに成長できる学校を作る
3　本年度の重点目標	①　生徒の心を耕す生徒指導体制の充実 ②　自ら学ぶ力の育成

4　重点取組内容・成果指標　　中間評価　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上	・全ての教科で共通した取組や各教科での個別の取組を明らかにし、学期毎に目標数値の達成を目指す。 ・学習規律の確立とともに、支持的風土の醸成と学び合う集団づくりを展開する。	B	・学期毎に数値目標の達成に向けた個別の取り組みを継続的に実施している。 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、学び合う集団作りに向けた取組に制限はあるが、その中で可能限り実践を重ねている。	B	・生徒のアンケートでは、「授業に主体的に取り組んでいる」と答えた生徒が85%であったが、振り返りを通して学びを整理している生徒は64%と、やや低調であった。学んだことを定着させるための手立てが更に必要である。 ・マイプランの成果指標を「達成できた」「おおむね達成できた」教師は90%ほどとなり、目標の80%を超えていた。	B	・小中一貫教育と学力向上推進事業の指定を最大限生かし、全職員が統一のテーマをもって研究を深め、生徒の学力向上につなげてほしい。
	○生徒の基礎学力や「活用力」の向上	○12月実施の県学習状況調査において、５教科すべてにおいて昨年度の正答率を上回る。また、活用力の問題においてもすべての教科で昨年度の正答率を上回る。	・全職員が参加する授業研究会や個別に授業を参観することを通して、授業構成の見直しや共通実践を進める。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を推進し、すべての生徒に達成感を味わわせる。	B	・全職員が参加した授業研究会を実施した。互いに日頃の授業実践を参観できる機会を設けている。 ・今後も、全ての生徒が達成感を味わうことができる授業づくりに継続して取り組む。	A	・2年生においては、12月の学習状況調査の対照平均比で5教科全て昨年度を上回ることができた。調査には活用力の項目がなかったが、「思考・判断・表現」の設問の正答率は県を上回るものもあった。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに取り組んだと回答した教師は83%、主体的な学習の実現に努めたと答えた教師は86%だった。生徒アンケートにおいても課題解決に向けて自分で考え取り組んでいると答えた生徒は85%であった。	A	・今後も生徒の学力向上のための地道な取り組みを継続するとともに、タブレットを使った新しいスタイルの授業についても研究・実践を重ねてほしい。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○1年生は音楽鑑賞や絵付け体験、2年生は職場体験、3年生は保育園訪問を位置づけ、全校一斉読み聞かせや、外部人材の活用や交流を通して、自分が成長していると回答する生徒を90%以上。	・体験活動や奉仕活動を通して自己を見つめ直し、心の変化に気づかせる指導を充実させる。 ・活動や体験の様子を地域や保護者に情報発信する。	C	・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、体験学習等が十分に実施できていない。今後、感染拡大防止の手立てを踏まえながら体験学習実施に向けた検討を重ねていく必要がある。 ・学校活動の様子は学校便りをはじめとした各種便りでできる限り発信するよう努めている。	B	・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、体験活動は十分に実施できなかったが、学級担任に限らず、多くの職員で道徳の授業を行い、自己の考えを見つめ直したり、心の変化に気付かせるような指導を行った。 ・学校からの各種便りを通して、生徒の活動の様子を発信した。また、生徒会や人権・同和教育の取組を通して、お互いの良さを認め合う活動を行い、掲示物等を通して思いやりの心を養う場を設けた。	B	・限られた活動を大事にし、生徒も教職員も全力で取り組んだことが伝わった。生徒の心を耕す取組についても継続してほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実 ○人権・同和教育に関する取組の充実	○いじめ防止等（いじめの防止等のための取組、事案対処等）について、関係職員や担任・保護者と連携した組織的対応ができていると回答した教員を100%。 ○「西中人権・同和教育たより」を毎学期発行し、生徒の活動の様子を保護者に伝える。	・月1回、生活・いじめアンケートを実施し、いじめの早期発見と組織的対応に努める。 ・生徒指導委員会や連絡会を通して、事案についての情報を共有し、一貫した指導を行う。 ・「いじめ・いのちを考える日」の取組を通して、命と人権を守ることの大切さを考えさせる。	A	・月１回の「生活・いじめアンケート」実施に取り組んでいる。また、アンケート結果は必ず学年全体で共有している。 ・「いじめ・いのちを考える日」を確実に実施し、豊富な資料を基に、生徒自身が自らの事として考える機会としている。	A	・「学校生活・いじめアンケート」で把握した情報について、細かく聞き取りと共有を行った。管理職への報告・連絡・相談を密にしながら、学校全体で組織的な対応を行い、再発防止にも努めた。 ・アンケートでは、「差別やいじめは許さないという意識をもち、お互いのよさを認め合い、思いやりの心をもって行動している」と答えた生徒が94%であった。 ・毎月「いじめ・いのちを考える日」を全学年で継続して実施し、自己肯定感を高めたり、こころを育てる活動を行ったりした。	A	・生徒指導委員会を毎週開催し、全職員に共通理解した上で組織的な対応ができている。差別やいじめは許さないという意識を生徒も教職員も持ち続け、未然防止に努めてほしい。
	◎自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	○自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがあると回答する生徒を85%以上。	・教科の学習、学校行事等を通して、自らの夢や目標について考えさせる場面や時間を設定する。 ・先輩や先人の事例を通して、自らの夢や目標の実現に向けての過程を思い描くことができる。	B	・教科の学習では、自らの夢や目標について考えさせる時間を設定し取り組んでいる。しかし、学校行事を通した実践活動や体験学習の実施については、今後、検討する必要がある。	A	・自らの夢や目標の実現に向けて努力しようとしていると回答した生徒は86%で、昨年度より向上している。体験学習が実施できなかったことも多かったが、学活など教育活動全体を通して、進路学習を充実することができた。	A	・今年度の蓄積を生かして、生徒に夢や目標を持たせる活動や取組を継続してほしい。
●健康・体つくり	❶「運動習慣の改善や定着化」 ❷「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」 ❸「安全に関する資質・能力の育成」	❶授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童生徒80%以上 ❷「健康に食事は大切である」と考える児童生徒93%以上 ❸児童生徒の交通事故を0（ゼロ）にする	・保健体育の学習で、運動の効果と行い方を学び、生活の中に運動を取り入れる場面を考える機会を設ける。 ・技術・家庭や保健体育など関連する教科等において、食に関する指導の視点を位置づけた指導に努め、食事の大切さを再認識させる。 ・交通安全教室等を実施し、啓発に努める。	B	・生活の中に運動を取り入れる大切さや食に関する視点を取り入れた学習指導の実施に努めている。 ・日々の教育活動を通して、交通安全指導に取り組むと共に、安全教育を中心とした啓発活動に努めている。	B	・体育の授業以外に、1時間以上スポーツや体を動かす運動をしていると答えた生徒は68%であった。 ・保健分野や体育理論の学習を通して、他の生徒との意見交換をしながら、実生活と関連付け、考える場面を設けることができた。 ・アンケートでは、「健康に食事は大切である」と回答した生徒が98.4%であった。 ・生徒の生命に関わる事故は発生しなかったが、交通事故の発生件数が昨年の5件から9件に増加した。引き続き生徒への啓発活動に努めたい。	B	・地域性もあって交通事故や生活事故については常に危険性を孕んでいると思われる。危険個所等については生徒に具体的に示したり考えさせたりしながら啓発を行っていってほしい。
	○自分の健康や体作りについて意識を高め、活き活きと部活動等に取り組む	○部活動や社会体育、文化活動に積極的に取り組む生徒を75パーセント以上にする。	・部活動の顧問を複数体制とし、臨場指導に努める。 ・部活動や社会体育、文化活動の意義を踏まえた指導と適正なあり方について、学校だより等で周知する。	A	・部活動顧問は複数体制で運用している。 ・部活動や社会体育・文化活動の意義について、様々な機会を活用し周知している。	A	・アンケートでは「部活動や社会体育・文化活動等に積極的に取り組むことができている」と回答した生徒が90%であった。 ・部活動は活動計画表を作成し、計画的に実施することができた。。複数体制で指導にあたり、部活動休養日を完全実施することができた。	A	・今後も継続してほしい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・校務分掌の役割分担を徹底させ、チームで効率よく仕事ができる環境整備を進める。 ・定時退勤日の6時閉庁の完全実施と平日でも目標とする閉庁時間を設定し、遵守するように意識化を図る。	A	・「チーム西中」として職員が一体感をもち業務遂行ができるよう職場環境整備に努めている。 ・定時退勤遵守に向けて取り組んでいる。	A	・教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守することができた。 ・8月を除く全ての月において時間外在校等時間を短縮することができた。（8月は昨年度に比べ長期休暇期間が短くなったことが要因。）	A	・今後も継続してほしい。
	○教職員の資質向上と教職員集団の組織力の構築	○各ライフステージに応じて、職員がペアやチームを組んで、互いに「学び」、「育てる」意識で教育活動ができる教師を85%以上にする。	・校務分掌や学校行事等でベテラン、中堅、若手教師でチームを組み、互いに教育技術を伝承し合いながら資質向上を図り、教職員集団の組織力を高める。	A	・日頃の教育活動を通して、共に支え会い資質能力の向上が図れるよう分掌組織を工夫するなど、OJTの効果的な運用に取り組んでいる。	A	・各ライフステージに応じて、職員がペアやチームを組んで、互いに「学び」、「育てる」意識で教育活動を行ったと答えた教師は76%であったが、全ての学校教育活動において、常にOJTを意識した効果的な学校運営を図ることができた。	A	・今後も大規模校の長所を生かして、OJTの効果的な運用を推進してほしい。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標（数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
★小中一貫教育の充実	★教科「日本語」の実践充実	★保護者・地域等に対する教科「日本語」の授業公開学級率80%以上 ★保護者等に対する教科「日本語」に係る情報を年間3回以上公開した学級率80%以上	・教科「日本語」の授業参観を全学級で年1回実施する。 ・長期休業中に校区内の小中学校で合同研修会を実施する。	C	・新型コロナウイルス感染症拡大防止を踏まえ、保護者や地域の方に向けた授業参観及び長期休業中の合同研修会は中止とした。今後、実施の可能性を含め、検討を重ねていく必要がある。 ・授業で学んだ内容は学校便り等で保護者に伝えている。	B	・教科「日本語」の授業参観は実施できなかったが、学校便り等で学んだ内容を伝えることができた。 ・校区内の各小中学校のコーディネーターが集まり、各学校の取組を共有することができた。 ・各学年でチームやローテーションを組み毎回の授業に臨むことで、質の高い授業を行った。	B	・来年度は保護者や地域の方に教科「日本語」の授業公開ができることを願う。
○特別支援教育の充実	○特別支援教育部会の定例化と教員の専門性と意識の向上	○特別支援教育コーディネーターと、関係職員を中心として特別教育部会を週1回開催。 ○特別支援に関する専門性が向上した教員を80%以上	・部会を週1回定期的に開催し、生徒の情報交換、支援計画や指導計画の作成や具体的な対応に関する協議を行う。 ・講師を招き、個々のケースについて全職員で校内研修を実施する。	A	・特別支援委員会を週１回開催し、特別な支援を要する生徒の状況と支援方法について協議している。 ・外部専門機関から講師を招き、個別対応についての指導・助言を受けている。	A	・毎週金曜日の特別支援委員会で、個々の生徒の状況を共有することで、今後の支援の見通しを協議することができた。 ・外部からの講師による指導・助言を複数回実施することができ、個別の支援に有効なものとなった。 ・全職員での研修会は十分に実施できなかったが、特別に支援が必要な生徒に対して、連携しながら対応を協議し、個別の指導支援に努めたと回答した教師は90%であり、個別対応のスキルが向上した。	A	・対応については試行錯誤の連続だと思うが、今後も全職員で対応にあたりスキルの向上に努めてほしい。
○生徒指導の充実	○生徒支援体制の充実と不登校対策の推進	○警察や児童相談所との連絡を、最低月に1回以上行い、さらにSSWや福祉方面との情報共有を密に行う。 ○教育相談、別室における学校生活支援員を中心に、「つなぐ」「働きかける」をキーワードに不登校の生徒や家庭に働きかける。	・原則、毎週生徒指導委員会と全職員参加の連絡会を開き、生徒や家庭に関する情報共有、そして複数の職員での対応を徹底する。 ・「電話作戦」や「担任＋１の家庭訪問」「別室登校」など本人・保護者と話をする機会を積極的につくり、チームで対応する。 ・学校適応指導教室や関係機関との連携を図る。	A	・生徒指導委員会を週１回開催し、協議した内容は、職員連絡会を通して、全職員に共通理解を図っている。 ・生徒一人一人に応じた指導ができるよう、外部機関との連携・協働の充実を図っている。	A	・生徒指導委員会を週１回開催し、協議した内容は職員連絡会を通して全職員に共通理解を図った。 ・生徒指導のスキルアップのため、特別支援や児童福祉に関する情報提供を、随時行うことができた。 ・教育相談委員会を週１回開催し、SCやSSWを交え、情報交換を行い、生徒一人一人に応じたきけ細かな対応ができた。 ・別室登校の生徒に対して、教室復帰を目標に様々な意見交換を行うことができた。	A	・教育相談委員会や別室を有効に生かしながら、生徒一人一人に応じた対応を今後も継続してほしい。

●・・・県共通　★・・・鳥栖市共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・学校教育目標「西中一心～夢の根っこを育てる～」のもと、①「生徒の心を耕す生徒指導体制の充実」と、②「自ら学ぶ力の育成」を、本年度の重点目標として全職員で取り組み、概ね達成できた。 ・①については、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い体験活動に制限がかかったため、本来、校内外の行事を通して生徒が自分自身を見つめ、新たな自分を発見するような機会が減ったことは否めない。来年度は今年度以上に工夫を重ね、知恵を出し合い、新しい形の体験活動を模索していく。また、今年度確立した生徒指導、教育相談、特別支援教育について、毎週、委員会を開催し、連絡会で全職員が共通理解を図る体制を継続し、学年や学校全体で組織的に取り組んでいく。そのことで教職員の専門性や生徒指導力の向上につなげていく。 ・②については、来年度から委嘱される学力向上推進事業を良い機会と捉え、小中９年間を見通した学習づくりと学習評価の在り方について研究に取り組み、主体的に学び続ける生徒の育成を目指していく。